東方學報 京都第85册(2010)：692－674頁

泥 孰 攷

稲 葉 穣

は じ め に

西暦651年，ササン朝最後の皇帝Yazdegird 3 世がMerv近郊で殺された時，直接に手を下したのは，アラビア語史料に hayāṭila هياطله と呼ばれるエフタルの集團だった，とされる。この集團を率いた長の名は，やはりアラビア語史料に Nezak Ṭarkhān نيزك طرخان と呼ばれる人物であった（Marquart 1901 : 76）。爆發的な勢いで擴大したアラブの大征服の際，イラン高原東部でアラブ軍と對峙したのは，それまでササン朝に服していたイラン系，エフタル系，テュルク系諸集團だったと考えられるが，メルヴ總督 Māhōe（あるいは Māhawayh）Sūrī にけしかけられたエフタル系集團が逃亡中の皇帝を襲ったこの事件は，ササン朝という大きな傘が外れたことによって露わになったイラン高原の複雜な政治狀況を象徵的に示す事件だったといってよい。

ところで，この集團を率いた Nezak Ṭarkhān なる人物は，アラブ征服期のイラン高原東部，アフガニスタン，および中央アジア西部の混沌たる狀況を讀み解くための一つの手がかりとなる存在とみなされてきたが，絕對的な資料の缺乏の故に，詳細は明らかになっていない。一方，よく知られているように中國の唐代前半は，中國の政治的影響力が大きく西に及び，それに關連して西方の情報が少しく詳細に漢籍に記錄された時代である。アラブによるイラン高原征服はちょうどその時期に對應し，アフガニスタンや中央アジア西部がアラブに征服される樣子が斷片的ではあれ，漢籍史料に書きとどめられている。その中には，この Nezak に關係すると考えられる事例もわずかではあるが見られる。本稿では，漢籍中に殘されたそのような事例の檢討を通じて，イスラーム時代前夜の中央アジア西部，イラン高原東部における政治文化のあり方を考察してみたい。

1．Nezak に關する從來の研究

現在のところ Nezak という語については，アラビア文字 نيزك とパフラヴィー文字 *nyčky* の二つの形が知られている。アラビア語形の方は，al-Balādhurī の *Futūḥ al-*

Buldān（9世紀末），al-Ṭabarī の *Ta'rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*（10世紀初）等の主要な年代記に見えるもので，上述のように651年，Yazdegird 3世がメルヴ近郊で殺された際，實際に手を下したhayāṭila集團の長として史料に初出する（Balādhurī: 387; Ṭabarī: i. 2878–2879; Cf. Hitti 1968: 491; Humphreys 1990: 84–85.）[1]。その後，Nezak Ṭarkhān は一旦アラブに服屬した後，708年にアラブに叛き，最終的には709年，現在のアフガニスタン北部，ヒンドゥークシュ山脈北麓の城塞に籠もったところをQutayba b. Muslim によって捕らえられ，處刑されている。年代記からはこれを最後にこの名前は姿を消すが，10世紀の地理學者 Ibn al-Faqīḥは，Balkh にあった Naw Bahār 寺院についてのエピソードを記す中で，この寺院の有力な信奉者として Nezak Ṭarkhān の名前をあげている（Ibn al-Faqīḥ: 322–324）。最初に登場した時點からクタイバに處刑されるまでほぼ60年間の時間があることから，この名前で呼ばれた人物は實は一人ではなく，NezakṬarkhān というのは，おそらくはエフタル集團のリーダーが世襲した稱號のようなものではないか，と考えられてきた。

その後，いわゆる“Iranian Huns”に關わる貨幣を總合的に研究した Robert Göbl は，獨特のパフラヴィー文字銘文を持つ一群の貨幣の存在を指摘し，それが5世紀から7世紀にかけてヒンドゥークシュ山脈の南側で發行されたものであることを明らかにした（Göbl 1967: i. 25）。ゲブル自身は銘文を *npky MLK'* と讀んだが，その後，Richard Frye と Janos Harmatta により，この銘文は *nyčky MLK'* すなわち Nezak Šāh と讀み直された（Harmatta 1968; Frye 1974）。この語の後半部はイラン語で「王」をあらわす言葉であるから，この Nezak Šāh というのもやはり稱號であり，Nezak Ṭarkhān との要素の共通性から，この貨幣を發行した王家自體がエフタルと關連を持つのではないかと考えられた。

ところが，1977年，Emel Esin は，少なくともアラビア語史料に見える Nezak Ṭarkhān は，tirek ṭarkhān と讀むべきで，それはエフタルではなく，西突厥系突騎施部族と關連する名稱なのだ，と論じた。エスィンの論據は

1．10世紀に al-Kūfī によって書かれたアラビア語年代記 *al-Futūḥ* の中では，この人物は「テュルク ترك 」であると記されている。
2．この人物の名前には“al-BRQŠY البرقشى ”あるいは“al-TRQŠY الترقشى ”という形容句が附屬しているが，これは“al-Türgišī”と復元できる。
3．このことから，この稱號は西突厥の，特に突騎施部に關係するものであり，それゆえ Nezak ではなく，テュルク語の tirek と讀まれるべきである。

というものであった（Esin 1977）。しかしながら，ほぼクーフィーの年代記の記述にのみ基づき，Nezak Šāh 貨幣の存在への言及を缺くエスィンの議論は，Franz Grenet によって

1）Mark D. Luce（2009： 272）は，この Nezak がメルヴ總督の娘婿であった可能性を指摘する。

反駁され，退けられている（Grenet 2002 : 216, n. 22）。

さて，これらとは別に，從來，Nezak に對應すると主張されてきた二つの漢語がある。一つは，「捺塞（*nat-sək）[2]」で，『册府元龜』卷 971 に，

（開元七年 / 719 年）四月……訶毗施國捺塞，使吐火羅大首領羅摩沙羅，獻師子及五色鸚鵡.

『新唐書』卷 221 下に

（開元）七年訶毗施王捺塞，因吐火羅大酋羅摩，獻師子五色鸚鵡.

と見える人物である。ハルマッタはここに見える國名「訶毗施」を Kāpiśī の，王名「捺塞」を Nezak の，それぞれ音寫と見なした（Harmatta 1996 : 374）。カーピシーは現在のアフガニスタンの首都 Kabul の北方 70 km ほどにあった都城で，現在の Begram 遺跡である。7 世紀前半に玄奘が訪れた時は，ヒンドゥークシュ山脈南麓からガンダーラにかけての地域を支配していた王國の都であった。しかしながら，グルネはこの記事に現れる羅摩娑羅なる吐火羅の首領の役割を重視し，この訶毗施および，その王捺塞は，カーピシーではなくヒンドゥークシュの北麓たるトハーリスターンと關連する，すなわち Nezak Šāh ではなく，Nezak Ṭarkhān の方を意味しているのではないか，と考えている（Grenet 2002 : 215, n. 21）。ただ，グルネも捺塞が Nezak の音寫であろうという點には特に疑いを挾んではいない。

ところで，この使節が唐に到來した數年後，725 年頃に新羅出身の僧慧超がこの地を訪れている。そこで彼は罽賓からガンダーラにかけての地方を治めているのは，前王家から王位を奪った「突厥」の王だと報告している。罽賓は一般にカーピシーと同義として漢籍に現れる名稱だが，すでに桑山正進が詳細に論じているように，慧超の記錄する罽賓は，突厥王の都であることなどから，カーピシーではなくカーブルのことである（桑山 1993 : 406 – 407）。そうであるなら，慧超は實はカーピシーについては何も言及していないことになる。これが，すでにカーピシー王家がテュルクに滅ぼされてしまっていたからなのか，あるいは存續してはいたものの，弱體化していて行歷僧の興味を引く存在ではなかったのか（桑山 1992 : 22, 38, 40），その理由は不明であるが，『册府元龜』の訶毗施がハルマッタの推定通りカーピシーにあたるとすれば，慧超往訪時にも小規模な勢力が殘っていたのかも知れない。桑山はこの點について，いわゆるベグラーム第三期の最終フェーズは，都城の一氣の破壞ではなく，それが徐々に廢れ放棄されていった狀況を示しているのではないかと指摘している（Kuwayama 1991 : 117 – 118）。いずれにせよ，719 年の訶毗施王捺塞の使節についての記錄は，周邊の狀況がある程度芋づる式に推定できると言う點で興味深く，

2）本稿における漢字中古音表記については李 & 周（1999）に從った。

かつ重要な情報であると言える。

もう一つ，Nezak の漢字音寫ではないか，と言われるのが「泥孰 / 泥熟（*niei-źiuk）」である。後で詳しく見るように，この言葉は突厥や鐵勒に關連して漢籍史料に登場する。管見の及ぶ限りこの言葉が研究者の注目をひいたのは，9 世紀に書かれたマニ教讃歌 *maḥr-nāmag* にマニ文字で nyjwk と書かれた信徒の名前を，F. W. K. Müller が漢籍に見える「泥孰」にあてたのが最初だった（Müller 1913 : 39）。一方，漢字で書かれた泥孰がアラビア文字で書かれた نيزك にあたるのではないかと最初に指摘したのは，おそらく Vladimir Minorsky であっただろう。イスラーム時代の歴史地理に關する古典的研究である*Ḥudūd al-ʻĀlam* の譯注において，彼は，「Nezak は中國史料の泥孰であろう」という極めて短い脚注をほどこしているのである（Minorsky 1970 : 338, n. 3）。

以上のような研究に立脚して，ハルマッタは Nezak という言葉の語源について，それをサカ語の *näjsuka-に遡らせ，「戰士」という意味を持ったのだ，と推測しているが，肝心のサカ語 *näjsuka-という形自體は現在まで知られていない（Harmatta 1996 : 374）。グルネは *Encyclopaedia Iranica* の NĒZAK の記事において，Nezak という言葉は「中世ペルシア語の nēzag「槍」に關連しうるが，現在までそれは十分には確證されていない。」と述べている。少なくとも現在我々が手にしている情報からこの言葉の語源に迫ることは難しいと言わざるを得ない。

一方音韻的に言えば，アラビア文字の نيزك とパフラヴィー文字の *nyčky* はよく對應するから，この二つの語が同じ音を寫したものである可能性は非常に高い。しかしながら上に述べた二つの漢字音寫形については，いくつか難點がある。捺塞の第二音節は心母であり，これはアラビア文字やパフラヴィー文字から想定される音とは異なる。さらに第一音節の母音は a（通常短母音の a）で，アラビア文字の ى ，パフラヴィー文字の y から想定される e/ī とはうまく適合しない。一方，想定される泥孰の發音は“nīžuk”のようなものであり，これはマニ文字に見える nyjwk とうまく適合するが，第二音節の母音u は，アラビア文字，パフラヴィー文字において第二音節の母音が表記されていないことから推測される，短母音a（あるいはゼログレード）とは合致しない。ただし，Nicholas Sims-Williams の教示によれば，Nezak という語の後半が中期イラン語で形容詞，名詞をつくる語尾 *-aka に對應するのであれば，バクトリア語を介在させることによって Nezak と泥孰が音韻的に對應する可能性はある。-aka はバクトリア語では *-ιγο* という形をとるが，これには*-αγο* と*-ογο* というヴァリアントがあることが知られているのである（Sims-Williams 2000 : 195）[3]。つまり Nezak という語が，主にバクトリア語が使われていた地域（おそらくア

3）これとは別に，そもそも Nezak の第二母音はゼログレードだったと考えることも可能かも知↗

フガニスタン北部，東部，あるいはイラン高原北西部）の發音を通じて漢字に寫された場合，nīžuk という音として寫されても不思議ではない。

このように見てみると，Nezak が漢字に寫されるとすれば，その音寫としては捺塞より泥孰の方がより相應しいように見える。しかしながら我々が利用できる情報として兩者が異なっているのは，捺塞の方はわずかなりとも，その文字で寫された何者かが存在していた歴史的狀況，背景についての情報を含んだ形で記錄されているのに對し，泥孰の方は，後述のように固有名詞の一部として，しかもアフガニスタンやイラン高原とは離れた中央アジア西・北部という場所において，エフタルとは異なる文脈で散發的に記錄されたものであるという點である。訶毘施王捺塞が本當に 8 世紀初頭のカーピシーの王だったのかどうか，現時點では確定しようがないが，捺塞という名前が Nezak を示している可能性自體は否定されていない。これに對して泥孰の方は Nezak の音寫としてはより可能性が高いものの，一方で，この言葉が用いられた背景や歴史的環境は解明されていない。筆者がそれを十分に行いうるかどうかはともかく，從來この點についての研究が缺けていたのは確かである。ただ殘されている情報がきわめて限定的であることから，歴史的狀況や背景の檢討を歸納的に積み重ねて泥孰＝Nezak の同定を補強することはやや難しい。そこで以下，漢籍史料に見える泥孰 / 熟の用例の檢討からこの語を含む稱號の構成のされ方を解明するとともに，逆說的ではあるが，泥孰＝Nezak と假定した場合，それが我々の持っている知見と齟齬を來すか否か，これまで不明だった何事かをそれによって說明できるか，という視點からの檢討も行ってみたい。

2．泥孰と阿悉結泥孰俟斤

上述のハルマッタはまたこの Nezak，特に Nezak Šāh 貨幣を發行したカーピシー王家を西突厥弩失畢部の阿悉結泥孰俟斤と結びつけて考えようとする。すなわち

> *nyčky MLK'* と Tarkhan Nizak の間に想定されていた結びつきが消え去ったのであれば，Nizak 王朝と西突厥阿悉結泥孰俟斤部の有力者との間に關連があるのは明らかである。この部族の首長や有力者は泥孰（*Nizük）という名前を持っていたのだ（泥孰莫賀設，泥孰俟斤，泥孰啜などを參照せよ）。（Harmatta 1996 : 374）

と述べているのである。しかしながら彼の想定にはいくつか難がある。

第一は，ヒンドゥークシュ南麓において Nezak Šāh 貨幣を發行した王家，すなわちハ

↘ れない。その場合，泥孰は *nīžk のような音の音寫であり，一方マニ文字 nyjwk の方は原音からの直接の音寫ではなく，漢字形からの音寫だったと見なすことができよう。

ルマッタの言う Nizak 王朝を，阿悉結泥孰俟斤部と結びつけようとするその同定にある。周知の如く，7 世紀前半に玄奘がこの地を訪れた際，彼はこの地の王が「刹利種」であると記している（大正：li. 873；水谷 1971： 47）。ここで刹利が何を意味しているのかという點については議論がある。一般にこの語は佛典中で「クシャトリア」の音寫語として用いられるが，これを刹利ではなく窣利とする『大唐西域記』の異本もある。窣利であれば，『大唐西域記』中ではソグドの音寫として使われている語である（Cf. 大正：li. 871；Chavannes 1903：217 n, 218 n）。ただ，いずれの場合でも，この語は王家がテュルクと何らかの關連を持っていたことを示しはしない。もちろん，玄奘がこの點に不注意であったとは考えられない。というのも，彼は一方で，歸路經由した弗栗恃薩儻那（カーブル，ガズニの西側の山嶽地帶）には突厥の首領がいたことを明記しており，しかもこの弗栗恃薩儻那の突厥こそが後にカーブルにテュルクシャー朝を開いた一族，つまり，慧超の言う罽賓の突厥王の一族にあたるからである（桑山 1993；稲葉 2004）。それゆえ，玄奘の記述によるなら，Nezak Šāh 貨幣を發行した王家はテュルク系とは考えられない。

一方，阿悉結泥孰俟斤（あるいはその俟斤に率いられた一團）は，俟斤という言葉に注目するなら，阿史那氏以外のテュルク，すなわち漢籍に鐵勒と描寫される者達であったと考えて良い。俟斤とはテュルクの稱號 irkin の音寫で，護雅夫の東突厥の稱號に關する研究（護 1967： 398－438）を參照するなら，それは後に述べる iltäbär と同樣，鐵勒諸部のリーダーに付與された稱號であったからである。そうして，同じく後で見るように，實は泥孰 / 泥熟という語は決して阿悉結泥孰俟斤部にのみ特有のものではなく，他の部族集團や個人に關しても史料中に現れる言葉である。それゆえ，Nezak という語のみを手がかりに Nezak 王朝と阿悉結泥孰俟斤部を排他的に結びつけようとするのは，根據に缺ける說である。

3．泥孰 / 泥熟の用例

さて，ここで漢籍史料に見える泥孰 / 泥熟という語を列擧してみよう。

A：突厥および東突厥關連

用例①：泥孰特勤

貞觀四年（630 年），頡利可汗が唐によって打ち破られた際，頡利可汗配下の多くの人々が唐にとらわれ，あるいは服屬してきた。そのうちには大度設，拓設，泥孰特勤，および七種部落があった（『舊唐書』卷 62；『新唐書』卷 99）

用例②：乙彌泥孰俟利苾可汗

貞觀 13 年（639 年），唐は右武侯大將軍化州都督懷化軍王であった阿史那思摩を立て

て可汗とし，黄河北岸にいた，かつて頡利可汗に従っていた民を統括させた。思摩は乙彌泥孰俟利苾可汗と名乗った。(『舊唐書』巻194上;『新唐書』巻215上)

用例③：阿史那泥孰

阿史那思摩が乙彌泥孰俟利苾可汗となった際，阿史那泥孰は左武衛將軍から右賢王へと昇進した。(『舊唐書』巻194上;『新唐書』巻215上)

用例④：阿史德暾泥熟

阿史德暾泥熟なる人物が，突厥第二可汗國の大臣として，開元10年から12年(722－724年)にかけて數度，唐の宮廷に使節として送られてきた。(『册府元龜』巻110，971，975，980)

B：西突厥關連

用例⑤：泥孰莫賀設

泥孰莫賀設は貞觀六年あるいは七年(632－633)に奚利邲咄陸可汗となる。(『舊唐書』巻194下)

用例⑥：泥孰啜

貞觀17年(643年)，泥孰啜は乙毗咄陸可汗(用例⑤の咄陸可汗とは別人)の指揮のもと，康國Samarqandを襲撃したが，略奪品を私領したことを理由に咄陸可汗に殺された。その復讎のため，胡祿屋なる人物が咄陸可汗を攻め，これを敗走させた。(『舊唐書』巻194下;『新唐書』215下)

用例⑦：阿悉結泥孰俟斤

651年頃，西突厥弩失畢部に任命された五人の俟斤の一人として，阿悉結泥孰俟斤の名が見える。彼が率いた集團もこの名で言及されているようである。(『舊唐書』巻194下;『新唐書』巻215下)

用例⑧：阿史那泥孰匐

阿史那泥孰匐は調露元年(679年)に阿史德溫傳と奉職によって推戴され可汗となるが，同年唐軍に討たれ殺された(『舊唐書』巻194下;『新唐書』巻215下)。

C：鐵勒諸部關連

用例⑨：沙羅泥熟俟斤

沙羅泥熟俟斤は薛延陀族の長，夷男の叔父で，貞觀16年(642年)，使節として唐の宮廷に送られてきた。(『舊唐書』巻199下)

用例⑩：闕泥孰別部

貞觀年間，太宗は鐵勒諸部を統括するために瀚海都護府を置き，李素立を都護に

任じた。李素立はその周邊を荒らしていた闕泥孰別部を平定した。(『舊唐書』卷185上;『新唐書』卷197)

用例⑪：歌邏祿泥孰闕俟利發

歌邏祿泥孰闕俟利發は貞觀23年（649年）に突厥別部の車鼻が唐に對して起こした反亂に加擔したが，後に唐に服屬した。(『舊唐書』卷194上;『新唐書』卷215上)

D：その他

用例⑫：泥熟家口

651年，阿史那賀魯が唐に叛いた際，賀魯に從うことを拒んだ泥熟なる者の一族が賀魯に連れ去られた。賀魯が討たれた後，薛仁貴はこの一族を解放し，故地へ送還することを高宗に上奏し，認められた。族長の泥熟はこのことに深く感謝し，その後唐に忠誠を盡くした(『舊唐書』卷83)。陳國燦はこの泥熟が，用例⑦に見える阿悉結泥孰俟斤ではないかとしている（陳1980：195)。

用例⑬：泥孰

最近トゥルファン出土文書中に發見された龍朔二年(662年)の日付を持つ斷簡を榮新江は歌邏祿文書と呼ぶが，その中に一度泥孰の言葉があらわれている。(榮2007)。

用例⑭：泥孰沒斯城

泥孰沒斯城は吐蕃の領有した城の名前。690年代に碎葉城の總督韓思忠が下した(『新唐書』卷215下，216上)。ただしこの城の名前については，いくつか異なるものが史料に記錄されている（Cf. 內藤1988：300－301)。

以上14という用例の數は決して多いとは言えないが，それでもそこからいくらか興味深い點を引き出すことはできる。

4．雅稱・美稱としての泥孰

すでに榮新江(2007：27－29)によって指摘されているように，これらの用例のうちのいくつかは固有名詞，人名と見なしうる。たとえば用例③の阿史那泥孰や，用例④の阿史德暾泥孰などがそれである。さらに，泥孰特勤，泥孰啜，泥孰俟斤，泥孰闕俟利發（用例①，⑥，⑦，⑪）なども，固有名「泥孰」なる人物が，特勤，啜，俟斤，頡利發などの官號を帶びた事例として理解することも可能かもしれない。

しかしながら，突厥の場合，實際には固有名と雅稱・美稱を區別することは難しいということには留意しておかねばならない。ある人物を特定する，という呼稱の機能からすれ

ば，それが元來固有名であろうが，雅稱，美稱の類であろうが，大きな違いはない。漢籍中でそれを區別することにそれほど注意が拂われてこなかったらしいという點については，呼稱の時閒的變化がしばしば等閑視されたという點からもわかる。すなわち突厥においては，ある人物が昇進した場合，通常新しい雅稱，美稱を含む稱號を得るのだが，漢籍中ではその新しい名乘りも古い名乘りも混在して用いられる場合があったのである。例えば用例⑤に見える泥孰莫賀設は，後可汗となって咄陸可汗と名乘るが，その後でも泥孰設と呼ばれている場合があるし，それどころか咄陸可汗泥孰という書き方も見える（『舊唐書』卷194下）。いずれにせよ，ある人物のキャリアの中の特定の段階で，漢籍中に見えるその人物の呼稱から固有名と稱號を切り分けて取り出すのはそれほど容易ではない。

そうではあるけれど，用例②に見える阿史那思摩の例は注目に値すると思われる。思摩は突厥の他鉢可汗（572－581位）の孫にあたると考えられるが，1992年に發見された彼の墓誌銘には，彼の家名が阿史那であり，彼の固有名が思摩である，と明記されている。この墓誌銘によれば，彼は昇進し，あるいは失脚した際に，様々に異なる稱號を與えられている。すなわち，最初彼は波斯特勤という稱號を持ったが，おそらく603年頃俱陸可汗となった。その後，啓民可汗との爭いに敗れて可汗位を失い，始畢可汗（609－619位）のもとでは，伽畢特勤（あるいは夾畢特勤）と名乘った。頡利可汗（619－630位）は彼に羅失特勤という稱號を下賜した。それから，彼は上述のように唐によってオルドス方面をおさめるべく可汗に擁立され，乙彌泥孰俟利苾可汗となったのである（鈴木2005：45）。

さて，この乙彌泥孰俟利苾可汗という稱號のうち，俟利苾というのは頡利發と同様，iltäbärの音寫である。iltäbärは，irkinと同様，東突厥においては鐵勒諸部の長に與えられた稱號だが，西突厥では，服屬した都市國家，小國の王達に稱號として與えられたことが知られている（『舊唐書』卷194下）。しかしここではおそらく本來の意味，すなわち「人々（il）を統べる（täbär）」という形容句として用いられているのであろう。用例⑤に見える，泥孰莫賀設の可汗としての名乘り，奚利邲咄陸可汗の，奚利邲の部分も同じくiltäbärを寫したもので，同様の意味合いで用いられた言葉だろう。

一方最初の乙彌（*iĕt–miĕ）は，脱鼻音化を考慮すればおそらくは“ibi，irbi”等の音を寫したものかと思われる。それゆえ，これは用例⑥に見える乙毗咄陸可汗の稱號の乙毗（*iĕt–b'ji）と同じ音の音寫であろう。乙毗の方はさらに“ibir, irbir”といった對音も想定しうる[4)]。殘念ながらこれにあたるような語は他の資料中に確認されておらずどのような

4）例えばirkinの音寫として漢籍中には「俟斤」「頡斤」と竝んで「乙斤」が見えるし，毗は突厥第二可汗國のBilgä Kaghanの音寫「毗伽可汗」に見えるように“bir”をあらわしうる。

意味の言葉なのかは不明であるのだが，乙毗という語の現れ方は，時期，地域の面でかなり限定的であることはわかる。すなわち，莫賀咄乙毗可汗（あるいは莫賀咄俟毗可汗，統葉護可汗の兄弟），乙屈利失乙毗可汗（咥利失可汗の息子，位 639－640？），乙毗沙鉢羅葉護可汗（咥利失可汗の甥，位 640－641？），乙毗射匱可汗（咥利失可汗の孫，位 645－651？）という，莫賀設（咥利失可汗の父）の系統に連なる四名（弩失畢部？），乙毗沙鉢羅肆葉護可汗（統葉護可汗の息子，位 630－632？），前述の乙毗咄陸可汗（統葉護可汗の孫，位 638－653）という統葉護可汗系の二人（咄陸部？），の六人がこの語を含む稱號を持っていたことが知られている。それぞれの活動年代や地域は正確には定めがたいものの，松崎（1982）によるなら彼らは 640 年代というおおよそ竝行する時期に，西突厥の弩失畢部と咄陸部をそれぞれ率いてイリ河を挾んで對立した者達であった。このような狀況を鑑みるなら，可汗のタイトルに見える乙毗という語もそれぞれの個人の固有名と言うよりは，その時期流行していた何らかの雅稱，美稱と考える方がふさわしい。思摩が「乙彌」と名乘ったのも，ほぼ同じ時期であったことから，このような流行に倣ったものだと見ることができる。

以上の如く，俟利苾と乙彌の二つの言葉が可汗という官號を形容するための雅稱，美稱として用いられている可能性は高い。そうであるなら，閒にはさまれた泥孰も，ここで同じ目的で使われた言葉と見てよかろう。先に述べた泥孰啜，泥孰特勤，泥孰俟斤，泥孰闕俟利發という名乘りに見える泥孰もまた，官號である啜，特勤，俟斤，俟利發を形容する雅稱，美稱とも考え得る。

5．西突厥の泥孰

用例⑦に見えるように，泥孰俟斤，すなわち阿悉結泥孰俟斤は，西突厥弩失畢部を束ねる五人の俟斤の一人であった。『新唐書』卷 215 下には

> 咄陸有五啜，曰處木昆律啜，胡祿屋闕啜，攝舍提暾啜，突騎施賀邏施啜，鼠尼施處半啜．弩失畢有五俟斤，曰阿悉結闕俟斤，哥舒闕俟斤，拔塞幹暾沙鉢俟斤，阿悉結泥孰俟斤，哥舒處半俟斤．

と見える。それぞれの名稱の最初の部分は，咄陸，弩失畢兩部に含まれたそれぞれの部族名をあらわし，後半がその部族を率いたリーダーの稱號であることは，突騎施の名がここに見えることからも閒違いないだろう。『舊唐書』卷 194 下，『新唐書』卷 215 上，『通典』卷 197 等は，突厥の官號として，屈律啜（köl čor），葉護（yabghu），俟利發（iltäbär），俟斤（irkin），吐屯（tudun），達官（tarkhan）の五つをあげるが，それに鑑みるなら，たとえば處木昆闕啜とは，　咄陸部處木昆部族を率いた闕啜＝Köl　Čor だったことは明らかである。

さて，ここで注目すべきは上掲の新唐書の記述では，弩失畢部に五人の俟斤がある，と言いながら實際には部族名が三つしかあがっていない，つまり阿悉結部と哥舒部について二人の俟斤があげられていることである。內藤みどりは以下のようにこれを説明している。

1．もともと咄陸部には五部族があったが，弩失畢部には三部族しかなかった。

2．西突厥全體の部族數を十でそろえ，咄陸，弩失畢にそれぞれ五を配するために阿悉結と哥舒については二人ずつ首長の名前をあげた[5)]。

內藤はさらに，弩失畢部でもっとも強力なリーダーだとされるのが阿悉結部の闕俟斤であること，咄陸部には闕啜と呼ばれる二人のリーダーがいること，そして『舊唐書』,『新唐書』,『通典』の官號リストに屈律啜＝闕啜が擧げられていることから，闕啜，闕俟斤とは，それぞれ咄陸部，弩失畢部の下位部族中でもっとも有力なリーダーの稱號であったのではないか，と推測する。そうであれば，阿悉結部の泥孰俟斤，哥舒部の處半俟斤（Čopan Irkin）は，それぞれの部族中第二位の稱號であった可能性が出てくる。內藤はこれに關して，用例⑥に見える乙毗咄陸可汗と泥孰啜および胡祿屋の抗爭を傍證として擧げる。可汗とその軍勢が敗走させられたことから，後者は咄陸部胡祿屋部族のリーダー，すなわち胡祿屋闕啜のことであり，彼が復讎しようとしたのは，同族の泥孰啜が討たれたからだったのではないか，というのである。つまり，咄陸部胡祿屋部族にも第一の首長闕啜と，第二位の有力者泥孰啜がいたのではないか，と考えるのである（內藤 1988：149－153）。內藤のこの推論の是非を判斷する材料は現在のところ得られてはいないが，これは十分ありそうなことに思われる。いずれにせよ，上掲の西突厥諸部族のリーダーのリストの中で，泥孰俟斤が闕俟斤や處半俟斤と同列に記されていることは確かである。テュルク語の köl は「池，湖」という意味を持つが，Maḥmūd al-Kāšgharī によれば，轉じて「深い湖のように叡智を湛えた」という意味の美稱として用いられたという（Dankoff & Kelly 1982－85 : i-137 ; Cf. 護 1967：429）。阿悉結部についても，泥孰という言葉が，köl と同樣官號 irkin を形容する雅稱，美稱として用いられた可能性は高いと考えられる。

以上をまとめるなら，漢籍史料に見える泥孰 / 泥熟の事例から，泥孰が，個人の固有名として用いられる一方で，官號を飾るための雅稱，美稱として用いられたと理解することができる。おおまかに言えば，後者の用法は西突厥關連の事例に多く見られるように思われる。

5）松崎（1982：74）は，ビザンツ使節ヴァレンティヌスの報告に，トルコが八つの地域からなる，とあることに注目し，元來の西突厥部族集團は八つであったのではないか，と推測している

6．Nezak 稱號

さて，ここで西方の Nezak についてもう一度見ておこう。最初に述べたように，Nezak Ṭarkhān という言葉は異なる人物が襲名した名乗りであったらしい。一方，貨幣に見える Nezak Šāh という名乗りも， 單一の人物のものではなく代々受け繼がれたものであったことは，長期にわたっていくつかの形式的ヴァリアントを持つ貨幣群の存在から了解される（Cf. Göbl 1967 : i. 25）。

Nezak Šāh という名乗りの後半部šāh は，言うまでもなく「王，支配者」を意味するイラン語であり，ヒンドゥークシュ山脈南側でも長きにわたって様々な名乗り，稱號の一部として登場する。一方，Nezak Ṭarkhān の後半部 ṭarkhān は，やはり中央アジアにおいてよく用いられた稱號で，先に擧げたテュルクの官號リストに見えるように，突厥時代，しばしば史料にあらわれる[6]。

以上の檢討から，この二つの言葉を含む稱號，名乗りが形式面では同じ構造を持っていることは明白である。すなわち，Nezak/ 泥孰＋官號（tarkhan, šāh, tegin, šad, čor, iltäbär, irkin など，少なくとも史料中でそれらが行政的な意味を持つ官號としてアテストされているもの），という構造を持つ。もちろん，漢籍史料中に見える突厥の可汗や葉護の稱號は基本的にそのような構造を持つのだが，ここで Nezak/ 泥孰が同じものであるとするなら，イラン高原東部，アフガニスタン東部に見える稱號も中央アジアの政治文化と共通する要素を持っていたことになる[7]。このことによって，Nezak と泥孰が同じものであると確定するわけではないが，最初に述べたように，兩者が同じものだと假定するとそこからどのような事實が見えてくるかを以下少しく述べてみたい。

言語學的，あるいは音韻論的吟味は筆者のよくするところではないが，それでも Nezak という言葉は，元來のテュルク語ではなさそうである。というのも，元來のテュルク語においては子音 n で始まる言葉は非常に稀であるからであり，また現在まで知られているいわゆる古代テュルク語の語彙中にもこの言葉に對應しそうなものは見いだせない。

6）羽田亨は tarkhan が漢語「達官」からの借用語ではないかと考えた（羽田 1958： 331）が，Clauson はそれが元來中央アジアの言葉で，おそらくは匈奴の時代に遡ると見ている（Clauson 1972 : 539－540）。

7）逆にイスラム時代の史料にも見える Bukhārā Khudāt や Šīr-e Bāmiyān，バクトリア語に見える khār Rob，あるいはササン朝のシールに見える官職名（Cf. Gyselen 1989 ; 2002 ; 2007）などは，イスラーム時代以前の「イラン的」稱號の構成の基本に「地名」+「稱號 / 官號」があったことを示しているといえるから，現時點での我々の知見に照らせば，Nezak Šāh や Nezak Ṭarkhān は少なくともササン朝的な政治文化から生み出されたものではない，と考えることができよう。

kaghan，irkin，iltäbär，tegin といった突厥に一般的な官號は，實は突厥以前の時代からずっと用いられてきたというのはよく知られている（Cf. 護 1967：279, n. 7）[8]。吉田豐は最近，čamuk（處木昆 etc.），čaviš（車鼻施 etc.），čopan（處半 etc.）という語もやはりテュルク語以外の起源を持つことを明らかにした。吉田によるなら，それはエフタルの言語であった可能性がある（吉田 2003；2004）。その理由の一つは，それらの語の用例が中央アジア西部に集中しており，それは突厥以前にエフタルが治めた地域とうまく適合することである。先に見たように，西突厥諸部のリーダーの中には處木昆闕啜，鼠尼施處半啜，哥舒處半俟斤などの名が見える。有名な突騎施可汗の蘇祿は，可汗になる前は車鼻施啜であった（『册府元龜』卷 964，971）。これらの言葉もまた，Nezak/ 泥孰を要素に持つ稱號と同様の構成を具えている。それゆえ，Nezak/ 泥孰もまた突厥によって借用され，再利用された非テュルク語，あるいは「エフタル語」のリストに加えることができるかもしれない。別の言い方をするなら，突厥によって征服された地域において，これらの「エフタル語」の雅稱や美稱が（少なくとも部分的に）再利用されて Nezak Irkin, Nezak Čor, Nezak Tegin といった名乗りが，Čaviš Čor や Čopan Irkin と同様のものとして產み出されたのではなかろうか。このような名乗りや稱號を構成する言葉は當然良い意味を持つと考えられるから，先にみた漢籍の用例中にあるように，それが一方で固有名として用いられても不思議はないだろう。

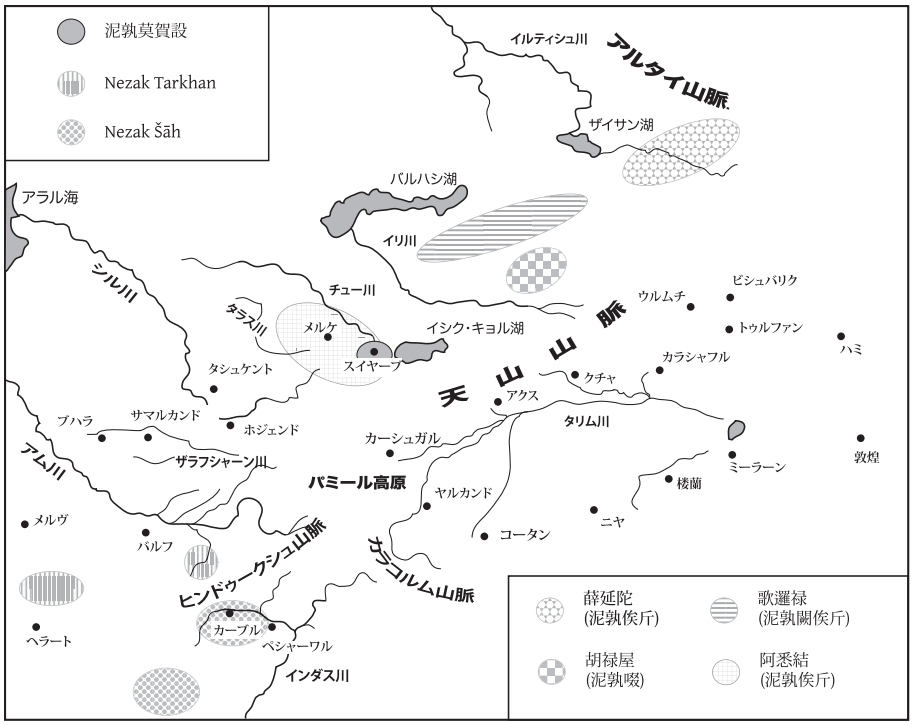
7．名乗り，稱號と部族集團

さて，おもに中央アジアを舞臺に興亡した遊牧系の帝國，連合體は，その中核となる部族，氏族のもと，數多くの部族集團，あるいは社會的ユニットが服屬し，まとめあげられて形成されたということはよく知られている[9]。一般にこのような帝國，連合體の壽命はそれほど長くないが，それらが崩壞した後も，前代に支配的であった集團は完全に消滅することなく，次に形成される連合體の一部をなす小規模ユニットの一つとして一定期間存

8）461 年の北魏文宣帝の行幸を記錄する山西省發見の石碑には，北魏の貴族階級の者達の名前が刻まれているが，それらのうちには tegin（直懃）を持つ者が見える（山西省考古研究所灵丘县文物局 1997：73－74）。これは鮮卑起源の人々による tegin 號の使用の直接的證據となるだろう。ただし，tegin 號が鮮卑に由來するかどうかはわからない。

9）É. de la Vaissière は最近エフタル遊牧連合體出現前夜のエフタル集團の狀況を檢討し，それらが東方から移住してきてからほぼ一世紀の間，トハリスタンにおいて他の集團の一つとして生き延びてきた，と論じた（de la Vaissière 2007：122）。彼らは移住先の文化とある程度同化しつつ，やがて強大化し，大國家を形成したというのである。de la Vaissiére 2005：23 も參照。

續したと考えられる。7世紀前半，ヒンドゥークシュ北部における嚈摩呾羅（＝エフタル）について玄奘が記録しているのは，まさにそのような狀態にあったエフタル集團の姿であろう（『大唐西域記』卷12；大正：li. 940）。このような事情のもとでは，遊牧國家の制度や政治文化は，ほとんど斷絶することなく，多くが繼承されていったとみなすほうが自然であろう。先に觸れたように，kaghan, irkin, iltäbär, tegin そして tarkhan といった稱號は，突厥以前の時代より中央アジアにおいて繼續して用いられてきた。もちろん，それぞれの稱號が用いられた文脈自體は，それぞれの時代や國家によって異なると思われるが，それでも，突厥によって Nezak 稱號が再利用されたという想定がある程度有效であるなら，それは，稱號そのものだけでなく，稱號を構成する形式，といった政治文化的要素もやはり繼承されていたことを示すといっていいだろう。



圖は，Nezak と雅稱・美稱としての泥孰が出現したおおまかな場所を地圖に描き入れたものである[10]。假にここに見えるように，ホラーサーン東部から天山北麓にかけての

10）實際には，西突厥の各部が正確にどのあたりにいたのかは定めがたいが，先學の研究を參考にしつつ，圖化してみた。これによれば，泥孰稱號を持つ人物が所屬した集團はほぼ天山北路沿いに，チュー河からアルタイ山脈まで東西に分布しているように見える。ちなみに內藤（1988：159, n. 92）は，弩失畢部が，突厥遊牧連合體出現以前にすでに，ある程度イラン文化に同化↗

帶狀の地域とこの言葉を結びつけうるなら，ササン朝崩壞後のイラン高原東端と西突厥支配領域に共通するバックグラウンドを提供し得たのは，現在の我々の知識から見れば最盛期のエフタル以外にはない。吉田が想定するように，かつてのエフタル支配地域の文化傳統（それがエフタル獨自のものかどうかは別にして）の一部がその後の時代にも様々な形で顔を出している，というかなり見通しのよい構圖を我々は手にすることができるのである。

むすびにかえて

以上縷々述べてきたごとく，Nezak と泥孰は音韻的に類似し，また共通する構造を持つ稱號の中で用いられている。さらにこれらを同じものだと假定することにより，我々はイスラム時代前夜の中央アジア西部からイラン高原東部にかけての地域における政治文化のあり方を考察する一つの手がかりを得ることができる。その意味において，Nezak と泥孰の同定は作業假說として十分な意味を持つものだと考える。

しかしながら，ここで十分注意をしておかねばならないのは，Nezak という語の使用が突厥以前の時代の政治文化から受け繼がれたものだとしても，この言葉を含む稱號を帶びた支配者や首長達のアイデンティティーや行動は，それとはまた別個に考察されねばならない，ということである。別の言い方をすれば，稱號（あるいはそれを構成する要素）自體がある程度のタイムスパンをもって，異なる政體の中で繼續的に用いられたとするなら，これを，それぞれの部族的，文化的，言語的アイデンティティーと排他的に結びつけることはもはや不可能になるということである。最初に觸れたエスィンの論を例にあげるなら，Nezak　Ṭarkhān がエフタル系なのかテュルク系（あるいはテュルギシュ系）なのかを，Nezak という言葉の考察のみに立脚して議論するのは，あまりに狀況を單純化しすぎることになる。いくつかのアラビア語史料に見えるように，Nezak Ṭarkhān は，エフタルの殘黨を率いた，前代の稱號をそのまま帶びた首長だったのかもしれないが（Cf. Grenet 2002: 216, n. 22），彼が，エフタルの稱號を再利用してつくられたテュルクの稱號を與えられた，テュルク集團のリーダーであった可能性自體は當然のことながらある。兩者を區別するには（もし區別する必要があるのであれば），彼が率いた集團の性格を明らかにする以外に方法はないのだが，殘念ながら今のところそれをするに十分な情報はない。さらに，現在我々が有している Nezak/ 泥孰稱號についての情報は，貨幣學者達によって 5 世紀に割り當てられている Nezak Šāh 貨幣のグループ I をのぞき，すべて突厥時代に關わるものである，

↘ するか，少なくとも影響を受けていたのではないか，と推測している。

という點にも注意を拂うべきであろう[11)]。

いずれにせよ，我々は特定の稱號や名乘りと，それを保持した人々のアイデンティティーとを結びつけるには大いに愼重でなければならない。7世紀トハーリスターンのローブの王が，自らの傳統的な名乘りであるkhārに加えて，tapaglīgh iltäbärという稱號を帶びていたという事實（およびその元となった，統葉護可汗による諸王への頡利發號の付與）からもそのことは明らかである（Cf. Sims-Williams 2000 : 88）[12)]。同樣のことは，從來議論があったところのNezak Šāh王朝の起源の問題についてもあてはまる（Cf. Kuwayama 2002 : 208－221 ; Grenet 2002 : 217－218）。すなわち，たとえグルネらが想定するようにNezak Šāhという稱號がエフタルに由來するものだとしても，ヒンドゥークシュ南麓からガンダーラをおさえた（非エフタルの）土着王朝が，エフタル時代に屬國としてエフタルから稱號を授けられていた，という可能性は十分にあるのである。

Nezak Šāh朝の歷史に關する從來の研究と問題點については，以前に少し觸れたことがあるが（Cf. 稻葉 2004 : 346－347），その後新たな發見により別の論點が加わっている。すなわち，ヒンドゥークシュ北側たるTalaqanと關わりがあると想定され，Khiṅgila，Toramāṇa，Javūkha，Mehamaの四人の支配者の名前を刻むストゥーパ奉獻銅板を研究したGudrun Melzerは，この銅板の年代を假に5世紀末と見ており（Melzer 2006 : 264），もしそうであるなら，そこに現れるKhiṅgilaが，漢籍史料に見える馨孽王朝＝Nezak Šāh王朝の始祖馨孽＝Khiṅgilaにあたる可能性が出てくるのである。9世紀以前のヒンドゥークシュ南側では，複數のKhiṅgilaが知られているため（Cf. Kuwayama 2002 : 254 ; Melzer 2006 : 258－261），この點はさらなる考證を必要とするだろうが，一方でこの銅板に見える四人の名を刻したそれぞれの貨幣はすでに知られている。そうしてそれらはNezak貨幣やēbodaloの銘を持つトハーリスターンのエフタル貨幣とは大きく異なる形式のものである[13)]。それゆえ，もし假に奉獻銅板のKhiṅgilaが馨孽にあたるとするなら，

11）Göbl 1967 : ii. 71 ff. はNezak Šāh貨幣のグループIを5世紀ガズニ近邊製造に始まるものとし，この年代は他の貨幣學者によっても大枠において支持されている（Cf. Alram 1996 ; Vondrovec 2008）。ただし，桑山は全くことなる編年を提示している（桑山 1993）。

12）Sims-Williams（2007 : 126）に見えるDocument jbでは，“Sart Khwadewbandan”なる人物が，“榮光あるエフタルのヤブグ，Robの王，エフタル王の書記，トハーリスターンとガルチスタンの裁判官……”と呼ばれている。この文書に見える「ローブの王」と呼ばれる問題の人物が，もしローブ土着の王家のメンバーであるなら，この事例もまた，土着の支配者が宗主から與えられた別系統の稱號を持っていた例になるかもしれない。

13）Afghanistan Meeting 2008 : Reconsidering Material and Literary Sources on the 6 th to the 9 th Century（2008年10月於京都大學人文科學研究所）におけるMichael Alramの報告“The Coinage of the Alkhan Huns”に據る。

7世紀半ばまで十二代續いていたその王家の發行した貨幣がある時點で大きく意匠を變えたことになり，それはなんらかの政治的狀況の變化を意味するのかもしれない。

稱號や貨幣に關するこのような複雜な問題を含め，イスラーム時代前夜の中央アジア史・アフガニスタン史における多くの未解決の疑問に答えるためには，新しい資料，あるいは既知の資料の新しい解釋が必要なことは言うまでもないが，それらは，Nezak の場合を例にとるなら，單に語源や語の意味の解明に有用なだけでなく，その言葉や稱號がどのような歷史的文脈，背景の中で用いられたか，という點をも明らかにしうるものであることが望まれる。

參 考 文 獻

Alram, M.（1996），Alchon und Nēzak : Zur Geschichte der iranischen Hunnen in Mittelasien. In *La Persia e l'Asia Centrale da Alessandro al X secolo*. G. Gnoli *et al*（eds.），Rome, pp. 517－554.

Balādhurī : Aḥmad b. Yaḥyā b. Jābir al-Balādhurī, *Kitāb Futūḥ al-Buldān*. Ṣalāḥ al-Dīn al-Munajjid（ed.），al-Qāhira, 1956.

陳國燦（1980），唐乾稜石人像及其銜名的研究.『文物集刊』2，pp. 189－203.

Clauson, G.（1972），*An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford, Clarendon Press.

Dankoff, R. & J. Kelly（1982－85），*Maḥmūd al-Kāšγarī, Compendium of the Turkish Dialects*（*Dīwān Luγāt at-Turk*）. 3 vols., Cambridge Mass., Harvard University Printing Office.

Esin, E.（1977），Tarkhan Nīzak or Tarkhan Tirek？: An Enquiry Concerning the Prince of Bādhghīs Who in A. H. 91/A. D. 709－710 Opposed the 'Omayyad Conquest of Central Asia. *Journal of the American Oriental Society* 97（3），pp. 323－332.

Frye, R. N.（1974），Napki Malka and the Kushano-Sasanians. In *Near Eastern Numismatics, Iconography, Epigraphy and History. Studies in Honor of George C. Miles*. D. K. Kouymjan（ed.），Beirut, American University of Beirut, pp. 115－122.

Göbl, R.（1967），*Dokumente zur Geschichte der iranischen Hunnen in Baktrien und Indien*. 4 vols., Wiesbaden, Otto Harrassowitz.

Grenet, F.（2002），Regional Interaction in Central Asia and Northeast India in the Kidarite and Hephthalite Period. In *Indo-Iranian Languages and Peoples*. N. Sims-Williams（ed.），Oxford & Tokyo, Oxford University Press, pp. 203－224.

Gyselen, R.（1989），*La Geographie Administrative de L'Empire Sassanide－Les Temoignages Sigillographiques*. Res Orientales I, Paris.

Gyselen, R.（2002），*Nouveaux matériaux pour la géographie historique de l'empire sassanide. Sceaux administratifs de la collection Ahmad Saeedi*. Cahiers de Studia Iranica 24, Paris.

Gyselen, R.（2007），*Sasanian Seals and Sealings in the A. Saeedi Collection*. Acta Iranica 44, Leuven, Peeters.

羽田亨（1958），回鶻文摩尼教徒祈願文の斷簡.『羽田博士史學論文集』下卷. 京都，東洋史研究會，

pp. 325－347.

Harmatta, J. (1969), Late Bactrian Inscriptions. *Acta Antiqua Academiae Scientiarum Hungaricae* 17, pp. 297－432.

Harmatta, J. (1996), Tokharistan and Gandhara under Western Türk Rule (650－750). In *History of Civilizations of Central Asia* III. B. A. Litvinsky, Zhang Guang-da & R. Sh. Samghabadi (eds.), Paris, UNESCO, pp. 367－383.

Hitti, P. K. (1968), *The Origin of the Islamic State*. Vol. I. (rep.) New York, AMS Press.

Humphreys, S. (1990), *The History of al-Ṭabarī* Vol. XV : *The Crisis of the Early Caliphate*. SUNY Press.

Ibn al-Faqīḥ : Ibn al-Faqīḥ al-Hamadhānī, *Kitāb al-Buldān*. M. J. de Goeje (ed.), Leiden, E. J. Brill, 1967.

稲葉穰 (2004), アフガニスタンにおけるハラジュの王國.『東方學報』京都 76, 313－382.

Kuwayama, S. (1991), The Horizon of Begram III and Beyond : A Chronological Interpretation of the Evidence for Monuments in the Kāpiśī-Kabul-Ghazni Region. *East and West* 41 (1－4), pp. 79－120.

桑山正進 (編著) (1992),『慧超往五天竺國傳研究』. 京都大學人文科學研究所.

桑山正進 (1993), 6－8 世紀 Kāpiśī－Kābul－Zābul の貨幣と發行者.『東方學報』京都 65 册, pp. 381－430.

Kuwayama, S. (2002), *Across the Hindukush of the First Millennium : A Collection of the Papers*. Institute for Research in Humanities, Kyoto University.

de la Vaissière, É. (2005), Huns et Xiongnu. *Central Asiatic Journal* 49 (1), pp. 3－26.

de la Vaissière, É. (2007), Is There a "Nationality of the Hephtalites"? *Bulletin of the Asia Institute* 17, pp. 119－132.

李珍華& 周長楫 (編) (1999),『漢字古今音表』(修訂本). 北京, 中華書局.

Luce, M. D. (2009), *Frontier as process : Umayyad Khurāsān* (a dissertation submitted to the faculty of the division of Humanities, University of Chicago).

Marquart, J. (1901), *Ērānšahr nach der Geographie des Ps. Moses Xorenac'i*. Abhandlungen der Königlichen Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen. Philologisch-Historische Klasse, Neue Folge Band III, Nro. 2, Berlin, Weidmannsche Buchhandlung.

松崎光久 (1982), 西暦六三〇年代の西突厥の情勢.『史觀』106, pp. 68－81.

Melzer, G. (2006), A Copper Scroll Inscription from the Time of the Alchon Huns. In : *Manuscripts in the Schøyen Collection : Buddhist Manuscripts* Vol. III, J. Braavig (ed.), Oslo, Hermes, pp. 251－314.

Minorsky, V. (tr. & com.) (1970) *Ḥudūd al-'Ālam* (*The Regions of the World*). 2 nd ed. by C. E. Bosworth, London, Luzac.

水谷眞成 (譯注) (1971),『大唐西域記』(中國古典文學大系 22). 東京, 平凡社.

護雅夫 (1967),『古代トルコ民族史研究』I. 東京, 山川出版社.

Müller, F. W. K. (1913), *Ein Doppelblatt aus einem Manichäischen Hymnenbuch*. Berlin, Verlag der Königl. Akademie der Wissenschaften.

内藤みどり (1988),『西突厥史の研究』. 東京, 早稲田大學出版部.

榮新江 (2007), 新出吐魯番文書所見唐龍朔年間哥邏祿部落破散問題.『西域歷史語言研究集刊』1, pp. 13－45.

山西省考古研究所灵丘县文物局（1997），山西灵丘北魏文成帝《南巡碑》.『文物』1997 年 12 期，pp. 70－80.

Sims-Williams, N.（2000），*Bactrian Documents from Northern Afghanistan* I : *Legal and Economic Documents*. Oxford, Nour Foundation in association with Azimuth Editions and Oxford University Press.

Sims-Williams, N.（2007），*Bactrian Documents from Northern Afghanistan* II : *Letters and Buddhist Texts*. London, The Nour Foundation in association with Azimuth Editions.

鈴木宏節（2005），突厥阿史那思摩系譜孝 —— 突厥第一可汗國の可汗系譜と唐代オルドスの突厥集團 ——.『東洋學報』87（1），pp. 37－68.

Ṭabarī : Abū Ja'far Muḥammad b. Jarīr al-Ṭabarī, *Ta'rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*. 3 ser. M. J. de Goeje（ed.），Leiden, E. J. Brill, 1879－1901.

大正：『大正新脩大藏經』100 卷，東京，大藏出版社，1924－1932.

Vondrovec, K.（2008），Obole in der Münzprägung der iranischen Hunnen. *Numismatische Zeitschrift* 116/ 117, pp. 269－300.

Yoshida, Y.（2003），On the Origin of the Sogdian Surname Zhaowu（昭武）and Related Problems. *Journal Asiatique* 291（1－2），pp. 35－67.

Yoshida, Y.（2004），Some Reflections about the Origin of *čamūk*.『中央アジア出土文物論叢』. 森安孝夫編，京都，朋友書店，pp. 127－135.